

男の映夕

星犀生室



夕映えの男一人

夕映え

てりけり

室生犀星
講談社版

昭和三十三年六月十五日 第一刷發行 ©

夕映えの男

定價 二九〇圓

著者 室生犀星
むろ せい さい

發行者 野間省一

印刷所 新日本印刷株式會社
東京都新宿區市谷本村町二七

發行所 大日本雄辯會講談社
株式會社

東京都文京區音羽町三ノ一九
振替 東京三九三〇
電話大塚(94)三二〇一(代表)

夕映えの男

目次

犀星
近作集

夕映えの男外十一篇収録

貝殻川	天皇	少女榮え	向日葵	まぼろし往來	夕映えの男	
九四	七六	五五	四八	三〇	七	

蘭野

一三

蟲姫日記

一四

唐笛

一五

捕縛

一六

行列の先にゐる人

一七

解説

一八

裝 畫 字 文 刻	裝 畫 山 口 蓬 春
畦 地 梅 太 郎	

夕
映
え
の
男

夕映えの男

美しい装幀の書物から、作者自ら遠退かるといふことは、その作家の荒廢ただならざるものがあつた。終戦前後から私は美しい書物といふものが出ないであつて、餘りに美しい書物はこれを見ることが拒まれる氣持になり、甚だ敬遠してゐた。一つは私にそんな書物の出版をもとめる本屋もないし、出版しても澤山賣れもしないので、私は半ばあきらめ、半ば悲しみ、もう一つは厭な氣持であつた。併し何といつても二年とか三年目に、自分の作品集成のはなたばを見ないで過ぐすことは、作家のさびしさは此上なきものであつて、おれももう本といふものに縁がないのかと、こころ愉しまざるものがあつた。眼のさめるやうな書物をたまに友人にも贈り、自分もこれを撫でさすつてみることは、こころの榮えなのだ、作家になくてならない天青地白の日なのである。

私は五六年の間かういふさびしい日を送り、知己からおくられる立派な作品集に返すための自著もなかつた。と言つて本屋にたのんで歩く譯にゆかない。知己朋友からの贈呈本がたくさんにたまり、その書物の重なりを見ながら、何とかして一冊くらゐは出版して返して置かないと、眼覺めも惡く心は贖つき、文學の上の地位もうすれてゆく思ひであつた。片方には書物にたいする

荒廢の氣合は愈々深く身心にくひ入り、かがやかしい装幀本は書屋にしまひ込んでも、その扉の前に少時立ち竦んで見ざるをえないのだ。幾らお前が見ないやうに片付けてゐても、書屋の中にあつて失はれないものの威壓は、却つて扉の外側で瞭然と金押シの文字を印映してゐた。私は著者同士がおたがひに贈りあふ友情的な書物の返事には、何時もお見せする自著もいまはなく戴いてばかりゐて相濟まないと、先づ謝まつてペンを擱くやうな始末だつた。しかも同じ作家からの贈呈本が二冊もたまると、いよいよ返事の手紙に窮して、つい、君はよい本がどんどん出てさぞ満足であらうと、正直に羨しがり、作家同士の禮儀と光榮を返し合ふことの出来ないのが、年月を隔てて鬱陶しかつた。何を置いても自著を身邊に用意しておくことが、作家の矜持としてもつてゐなければならぬのだ。

文學者はことに小説家といふものは、ただ金をとるために小説を書いてゐるものではない、たとへ恥かしい女のことを書いた小説でも、集編して作品集として出版された時、一つの小説はべつたの小説によつて辯解をしてくれるものであり、十篇の作品はそれぞれに守り合つて、一つの小説の悪いところを別の小説が解き明しをしてくれ、十篇がみんな讀む人にどうかね、よく讀んでくれたまへと言ふやうなものである。或る意味で十篇の小説自身がもう一度大部隊の小説群となり、小説自身が小説を書いてゐるやうな嬉々たるものであつた。そしてそのやうな小説家は一年とか二年間にどういふ仕事をしてゐたか、小説といふものは決して讀み捨てるための、面白く可笑しく色氣たつぷりな讀者を釣ひ込むための讀物でないといふことを證するためのあざ、やか

な集積によつてやつぱり彼奴は人間を書く才能は零だが、くそまじめに決して嘘をかいてゐないといふことが解り、その書物でさらに小説家何の何某の寄りどころもわかるものであつた。何の何某の生きてゐる證據を雑誌や新聞のきれぎれな作品ではなく、まとめて、さあ見てくれたまへと大きく出られる機會のものだ。ずつと展げて見渡すと神田や本郷の本を賣る店々に、その小説家の死後も秋の日の往來の明るみに反射して、書棚にうき出してゐる名前があつた。萩原朔太郎や堀辰雄や横光利一君らも、そこにゐた。そこに私もいつかはゐるやうになるであらう、そこにゐるためにも、厚い表紙と固い膠に鐵の二本の曲り釘が必要なのだ、それらを用ゐた堅牢な書物があるのである。若しその書物が出版されてゐなかつたら、作家は犬死だといはれても、犬死といふ名稱をいやでも、うけとらざるをえない。私は犬死でもよいとふて腐れたこともあつたが、此處まで來ると犬死といふ名前で死にたくなかつた。死の慾望ではない、生涯のしごとをゴミ芥のやうに私といへども棄てたくない。秋の日の東京、本郷神田ののどかさを眼にすると、古本屋さんの棚の上に、眼をほそめて坐りこんでゐたかつたのだ。

作品集はその作家の賣れると賣れないのに關係なく、二年くらゐ間を隔いて出版されるべきであり、近作集を持たない作家は刀をさしてゐない武士とおなじ腰抜けであつて、そのばか面は見られたものではない、誰の頭にもあるこのうらぶれの感情は、ひましに、生きることもしやになるものである。幾ら書いても、どれも雑誌に出た自作の切抜きばかりがたまり、切抜きは六年、七年の間に悪い印刷紙が端の方から黄みを帯びて行き、いそいで雑誌から切り抜いた分には、本文印

刷が二三行もやぶれたのもあつて、読み直しても意味の通じないのもあつた。自分の文章でも、そんな殘缺を後から綴り合せることが容易ではない、印刷になつた文章は印刷自身の權威が固まり、作家と雖も、そこだけ削除するより外に方法はない、鉛で作られた活字をくぐつては全く文章を決定鑄刻してしまつて、剝がすことが出來ないものである。そんな切抜きはたまりにたまり、読み直すこともいやになつてゐた。文章はつねに、さらさらと清くをさめて置かなければならないと心がけてゐても、裝飾形容に充ちた、ありもしない才能を胡魔化して綴り合せた私の小説類は、こんなふうに従らに文庫内に、重なり合ひ、叫びをあげてゐた。これをすぐふ者は私一人しかない、これをすぐふことはこれらの小説類を本にまとめてやることだ、併し病ひを持つた文章は誰も出版してくれ手がなからう、私はそこでひそかにそれらの切抜きを引き裂いて、自ら風呂場の焚口に下りて行つて焚いた。どうせ身過ぎの文藝渡世だ、おれはおれなりで滅びても、くいはない筈だ、もともと投書家上りの何處を向いても、おれ自身しか見えない世界でのし上つて來たのであるから、もとのしやつ面で生きて行かうと圖太く身構へ、本のない男、本をもたない男、七年も一冊も作集のない男として、私は人の前でも、人のゐないところでも威張つてみてゐた。人生は威張つて生きるよりみちのないことが、しだいに判り出して來た。よい作家になれなかつたら、苛酷慘忍な批評家だましひをぶら下げて歩くんだねと、私はどこに行つても原稿の賣れない無名作家にさう教へて、その生き方よりほかに生きられない男に、悪い智慧をつけてゐた。

私は或日切抜きの中から一綴りの詩の原稿をつまみ上げ、その日からその原稿をていねいにな

ほしはじめた。そしてこいつはものになると、その詩に迷ひはじめた。四十篇くらゐの原稿は四六判に組んで、序文やら後書やら目次をいれると、百ページ近く見つもられ、それに厚い表紙をつけて綴ぢ上げると氣の利いた詩集になりさうであつた。印刷の事はよく判らないので雜誌社の人があると、熱心に活字の組代刷代製本料などをたづねて見ると、二千部くらゐで十二三萬圓くらゐの持出しで、書物になることが判つた。二十九歳の時に自費出版をして詩集を出したが、生涯のしめくりに最後の詩集も自費で出して見よう、何だか大へん面白い仕事のやうに思はれ、私はそれを古山高麗雄さんに見積りと販賣とを頼み、千部を賣切るともとが取れ、あとの千部で私自身が本屋から貰ふやうな印税を、私自身から取るやうな計算方法であつた。私はふたたび謙遜の皮肉と、子供らしい勇躍まで感じて、これは是非刊行すべきだと思つた。各作家から贈られた本のお返しも出来るし、あの男の詩にもまだ餘韻があると思はれたかつた。この窮餘の一策は溫和な古山高麗雄さんをちよつと驚かせたらしかつたが、私は十萬圓くらゐで上げたいといふと、そんなにまでして詩集を出したいんですかと、怪訝さうに言ひ、出来るだけお世話してあげますといつた。それから毎日原稿を弄くり愉しい日をおくつた。おれにも未だやけくそになり切れない、縫るものを自分のなかに搜してゐる氣勝さがあると、古山高麗雄さんが來るとああだ、かうだと煩さくつき纏つた。だが或る朝の目ざめに、私は慄然として莫迦めと朝のよい頭の切れあちを見せて歟鳴つてみた、くたびれた詩を綴り合せてそれを自費出版にしても、一たい、誰にその詩集を讀んで貰ふつもりなのだ。たとへ、それが發行されたとしても諸方に贈呈して最後に、お

前の机のうへに一冊のこるだけだ、たかが百頁の伸び縮みも出来ない固い石ころの詩がつまつてゐるだけである。誰一人として氣なげだと褒めてくれないばかりか、彼奴も腕もづき仕舞ひに腕もづいてゐて、そのあり體には最早すくはれない、文士の最後ののたれがある、もつと空威張でもいいから、根氣好く何糞といふ面を打通してくればよかつたのにと、心ある人はさう言つてくれるかも知れない、こいつは考へ直してかかるべきだ、一たい、詩とは何のたは言をいふのだ。お前自身は小説の方が不景氣になると急に詩人面に化け、小説の景氣が良くなると詩ももう書けませんと言つて、孰方にでも都合好く彼方此方とぺたぺたしてゐるくせに、いまさら詩集を發行するなどは、何とみれんのある男であらう、私は茲に氣がつくと慄毛をふるつて、古山高麗雄さんに手紙を書いて詩集發行は中止した、もう手筈もきまつてゐる筈の中止は甚だご迷惑と思ふが、事情があつてあの原稿はお返しくださいと書いた。時々印税の計算を間違へてまだ不足してゐると、時々へんな事をいふ私に、古山さんは内々どうもあの方は氣が變るばかりでなく、たまにひよんな事で絡んで來る方だ、こんどの詩集發行もへんなことを言ひ出し、明日にでも出してくれと言ふかと思ふと、突然けろりとして原稿お返しくださいである。くさいぞと思つたがまだ正氣があつたのだ、古山さんが原稿を返しに來ると、私はけろりとおこりの落ちたやうな顔付で言つた、どうしてあんな自費出版なんてあさましい氣を起したんだらうね、窮餘の一策なんてものは文士にはない筈が、よく判つてゐないんだね、さう言つて私は原稿をうけとると眼のとどこかないところに、片づけて了つた。ばかばかを嘲笑はれずに濟んで、私のむなしい日は續いた、著者同士の

自著の返しに、私はおなじことしか書けなかつた。何時も御高著いただいてお返しもせずに相濟まんと思ひます。私もせめて一冊くらゐよい本を出したいのですが、まだそこまで行きませんので、お禮かたがた右まで、と、刀をもたないさむらひは刀を見せてもらつたお禮狀を書いてゐた。むかし刀を質にいられたさむらひは竹光といふ、竹をみがいた刀のふうていをしたものをさしてゐたが、私は竹光はさすがにさして歩かなかつた。その代り私は毎日近所の石垣の石つむ處ばかり見て歩いた。

夕刻もやや眼にくらさがつたはり、眼のしごとの邪魔をする時間であつた。六十歳くらゐの爺さんがリヤカーで曳いて來た石を下ろし、それを高さ三尺くらゐに積み上げてゐた。重い川石は一個あたり二三貫目くらゐあつて、その石を相互に組み合せ、墨繩は五間引かれてゐた。爺さんの呼吸づかひが聞え、腰は曲つたなりに固まり、秋の日没はどんどんくらくらなつて行つた。きのふもこんな夕方に爺さんは荒仕事をしてゐたのだ。朝のしごとは出が八時であるが、その前に六時から二時間、他のしごとをし、八時には別の家に仕事に行つた。夕方常雇の仕事を五時に切り上げると、六時半までこの石垣積みをしてゐるらしい、その刻限は私の散歩時間だつた。往來から背中だけが見え、黙つた爺さんの着ぶくれた盲縞の汚れた紺黒の着物だけが、物憂くうごいて見えた。その翌日も翌々日も爺さんは重さが肩にくる石と闘つた。私はやはりその傍らをだまつて通つた。金にすれば此處は信州の田舎であるから、四百五十圓が一日の日當であつた。恰度、

私のうけとる書き物の原稿料といふものは、この爺さんの四倍の額であつた。私にああいふ重労働は出来ないにしても、私自身が不倖せにあんな仕事をしなくてもよい事と、どう生涯に間違ひがあつてああしなければならなかつたかも知れない事に、頭を突き込んだ。卑賤な私のうまれは始終他人の重い労働のしごとに、一應、そこまで立つて見なければならぬことが、歇むない必要であつた。傲慢不遜にある脆いよわさが、この爺さんを見ると私のしごとをたすけて、はげましてくれた、この爺さんも私にどうだお前もただ見て通るわけに行くまい、ただ見て通れないものはお前に遣つた物だから、お前はそれだけ貰つてけふはお歸り、後にはなにもない筈だ、さういふ立場はこちらが乞食のやうに何かを貰つてゐるわけだつた。

後ろの小山からも、これも毎日石をかかへて下りる一人の爺さんがゐた。六十歳くらゐで山裾の家で庭をつくるのに、山の石が車で降りないため、お腹のあたりに三四貫目もある目の込んだ重い奴をかかへ、みぎと左にからだをよぢりながら、終日草場で足を決め、すべらないやうにその仕事は、夕刻くらくなるまで續いてゐた。私はその山ふもとを例の散歩をしながら、その爺さんがやつと抱へてゐる石を眼にいらした。胸ははだけ足元はひよろつき、呼吸は火になつて吐かれた。與へられた爺さんは石を搬ぶだけの仕事であつて、それだけは續けなければ邸内の石垣は積まれないのである。私の知つてゐる限りでは爺さんはもう一週間餘りになる作業を、木の間を縫ひ、草の間をくぐり、汗は全面にあぶらとなつてながれる間をはたらき續けた。一言もいはない、一定の時間を置いて下りて來るとまた登つてゆくのである。そして例の道路ではリヤカーが